令和６年度　都立小石川中等教育学校　学校経営報告

東京都立小石川中等教育学校
校長　鳥屋尾　史郎

１　今年度の取組と自己評価

（１）教育活動への取組と自己評価

学校経営・組織体制

＜目標＞
小石川教養主義、理数教育、国際理解教育を全教職員で推進し、学校の組織的経営の強化と課題に対しての組織的解決を図る。
＜方策＞
(1) 主幹教諭及び分掌主任が経営計画の進行管理を行い、定期的に進捗状況を報告する体制を推進する。
(2) 「一台端末活用-ＰＪ」「出願書類 - ＰＪ」「ＳＳH-ＰＪ」「グローバル-ＰＪ」を設置し、それぞれの課題解決に当たるとともに、各分掌、学年、教科との連携を図る。
(3) 教科主任会議及び教科会を活用して、組織的な教科指導体制及び教科指導に関する人材育成を推進する。
(4) 後期課程教育課程完成年度に伴う教科・科目の指導内容の充実、観点別評価の適切な実施、Ｃ４ｔｈの運用によるスムーズな成績処理により、教育活動の質の向上を図る。
(5) 経営企画室職員の各職層に応じた資質・能力の向上を図り、経営参画意識を高める。レベルの高い教育活動を推進するため、予算執行や施設整備等、経営企画室所掌事項において改善を図る。
(6) 学習指導要領改訂に伴う大学入試の変更や推薦型選抜の新たな動向等に注目しながら、教育課程と高大接続とを連動させるため、教務部と進路指導部とで連携を密にして、教科、学年とも情報共有を図り組織的な運用を行う。
(7) ＰＴＡ及び紫友同窓会と連携し、高い教育効果が期待できる取り組みを行う。
(8) 業務の精選化、効率化を図り、教職員のライフワークバランスを推進する。

(1) 毎週の企画調整会議において、主幹教諭及び分掌主任から業務の進行報告を行い、教職員全体に周知する体制を取った。また、毎学期に実施した開拓 21 委員会（学運協）に業務の進行と課題を報告して、外部委員からの意見を組織運営に生かした。
(2) 「一台端末活用-ＰＪ」「出願書類 - ＰＪ」「ＳＳH-ＰＪ」「グローバル-ＰＪ」それぞれのＰＪで課題について検討を進めた。「一台端末活用 - ＰＪ」を中心として、Teams の使い方の校内研修を行い、個人情報保護の観点から教職員の周知を図ったこと、「出願書類 - ＰＪ」を中心として、様式が変わった大学出願用調査書の作成、点検の段取りの調整を適切に行った。
(3) 教務部により教科主任会議を開催し、観点別評価の在り方や「指導と評価の一体化」について共通理解を図った。また、各教科において教科会を週１回程度開催し、教科指導について研修を深めた。
(4) Ｃ４ｔｈの運用について、教務部を中心に各教科、学年担当教務に徹底し、適切に指導要録の作成、調査書の作成に取り組むことができた。
(5) 経営企画室は、教職員と情報交換を密に行いながら、予算調整会議および予算執行の適切な実施、施設の維持管理、入学選抜業務においてのミスのない業務を遂行した。
(6) 教務部と進路指導部が連携し、学習指導要領の変更に伴う大学入試出題の変化、推薦選抜制度の変更に対応し、各学年、教科の対応、生徒への指導を適切に行った。
(7) 部活動やＳＳH関連のコンテストへの出場などに、ＰＴＡならびに紫友同窓会からは多大な支援を受けることができ、海外での科学系オリンピックや国内の全国大会規模コンテスト出場などが可能となり、きわめて大きな成果を上げることができた。
(8) 業務の効率化、ライフワークバランスの重要性への認識が教職員に定着し、超過勤務時間となる職員は全体として減っているが、業務量の多さから完全に超過勤務を解消することは継続して課題としていく。

学習指導

＜目標＞

(1) すべての教科・科目で基礎・基本の徹底を図るとともに、基礎・基本から発展させた高度な知識、技能、必要な思考力、判断力、表現力等の能力、及び主体的に学習に取り組む態度を育成し、学力の向上を図る。

(2) 中高一貫教育校、ＳＳＨ指定のアドヴァンテージを最大限に生かしながら、教科横断的、学年縦断的な授業を取り入れるなど、より質の高い授業を実施して生徒の学習意欲を高める。

＜方策＞

(1) 習熟度別授業、少人数授業等を通して、基礎・基本を徹底し、様々な補講、講習等の充実を図る。

(2) 「小石川セミナー」「サイエンスカフェ」「グローバルカフェ」を一層充実させる。

(3) 小石川教養主義に基づく本校独自の教育課程の特色を一層充実させる。

(4) 生徒に予習・復習の学習習慣を定着させ、自宅学習時間の確保を図る。

(5) 教育課程及び授業時間数を適正に管理する。

(6) 「小石川フィロソフィー」等における学校図書館や外部図書館の活用、「ビブリオバトル」の充実などを通して、より質の高い読書活動を推進し、生徒が主体的に学習に取り組む態度を育成する。

(7) 「小石川フィロソフィー」「小石川サイエンス」等、本校独自教科、科目において、一層の教科横断型、学年縦断型の授業や研究発表に取り組む。

(8) 後期課程の生徒一人一台タブレット端末所持によるデジタル技術、ＩＣＴを活用した教育を推進し、より効果の高い学習活動の開発に取り組む。

(1) 習熟度授業を英語では１～６年、数学では１～５年で実施した（基本は２クラス３展開だが、４、５年の数Ⅰ数Ⅱおよび６年のコミュニケーション英語Ⅲは２クラス４展開)。少人数授業は、４年現代の国語と５年古典で実施した。進路指導部の主導で夏季休業日中の講習・補習を実施するとともに、英語、数学の学習が遅れ気味となる生徒を対象とした補習を放課後に実施し、進路対策として土曜日講習、早朝講習を実施した。

(2) 今年度の 3 回の小石川セミナーでは、1 学期は東京大学 定量生命科学研究所 小林武彦教授を講師として「生物はなぜ死ぬのか」、2 学期は、JT 生命誌研究館名誉館長 中村桂子先生を講師として「「私たち生きものの中の私」として生きる―生命誌の視点から―」、3 学期は本校の中等教育学校になった後の卒業生（1 期生）である東京大学大学院理学研究科助教　森脇　可奈先生に講演をしていただいた。サイエンスカフェ、グローバルカフェについても充実させることができた。

(3) 全ての教科・科目を全生徒が学習する教養主義教育を今年度も実施するとともに、全学年で実施する小石川フィロソフィー第二外国語の学習などにより教育課程の充実を図った。

(4) 各学年とも毎日の生活時間における学習時間の確保に指導を行い、自宅学習の習慣を根付かせた。

(5) 定期的に授業時間数の管理を適切に行い、特に行事等に伴う臨時時間割も授業ごとの過不足がないように調整した。

(6) 「小石川フィロソフィー」の課題研究を進めるにあたって、教科や科目を超えて生徒が課題を発見できるように指導を進め、小石川サイエンスでは、理科の科目を横断した授業を展開するなどの工夫を行った。また、「小石川フィロソフィー」の発表会や、国語科や生物科などの授業で学年を超えた発表や授業を展開し、全国に類を見ない縦断型の授業の実践を進めた。「小石川フィロソフィー」の授業時間は、優先的に図書室を使用できるようにし、課題研究で積極的に活用した。図書委員会が中心となってビブリオバトルを開催し、読書活動の活性化に努めた。今年度も東洋文庫と生徒全員の利用契約を行い、学問への意識づけをしやすい環境を整えた。

(7) 昨年度に引き続き理数探究基礎（小石川フィロソフィーⅣ）などで生徒一人一台端末を活用し、高いレベルでのＩＣＴを活用した教育を実践した。

生活指導

＜目標＞
生徒に自立を促し、生き方・在り方を考えさせ、自律に基づくソーシャルスキルを身につけさせる指導を推進する。
＜方策＞
(1) 時間厳守や身だしなみなど、最低限のルール、マナーの指導を徹底する。
(2) 日常の教育活動を通し、あいさつを励行するなど、社会性や自律性を育成する。
(3) ダイバシティの重要性、相手の立場に立った人権や尊厳の尊重、プライバシーや個人情報の保護に配慮できるように指導する。
(4) 思いやりの心や奉仕の精神を育成し、信頼し合える人間関係を構築させる。
(5) 美化活動や環境保護、持ち物や施設を大切にすることなどに対する生徒意識の向上、公私関わらず物品管理の徹底を指導する。
(6) 関係機関と連携し、交通安全、薬物乱用防止、携帯電話の危険性などをテーマにセーフティー教室を実施する。また、文京区青少年問題協議会と連携し、地域の情報を共有して安全教育を推進する。
(7) 体罰の未然防止に向けた教員研修を通して、生徒理解と信頼関係に基づく生活指導の徹底を図る。
(8) いじめの未然防止、早期発見、早期対応の徹底を図る。「学校サポートチーム」の助言・支援を活用する。生徒に自立を促し、生き方・在り方を考えさせ、自律に基づくソーシャルスキルを身につけさせる指導を推進する。

(1) 遅刻指導に力を入れるとともに、各学年の生活指導において、「時間・期限」厳守が互いの信頼づくりに必須であること、ＳＮＳを利用する際に気を付けなければならない注意や、身だしなみをくり返し指導した。
(2) 学校生活の中で教員が率先して挨拶し、生徒に挨拶をすることがコミュニケーションの第一歩であることを伝えた。また学年集会、道徳などを通してソーシャルスキルの習得や規範意識の醸成を促した。
(3) 道徳活動、ホームルーム活動、海外の生徒との交流等を通して、ダイバシティの重要性、人権や尊厳の尊重、プライバシー保護を学習した。
(4) 校内の美化活動や人間と社会の校外活動等で美化の必要性、環境保護の視点を学習した。
(5) 交通安全週間中、学校付近の交差点において、ボランティア生徒や委員会生徒による地域と連携した安全指導を行った。
(6) １学期末に薬物乱用防止教室を実施し、また３月にSNSの利用をテーマにセーフティー教室、地域避難所設営のシミュレーションを実施した。落とし物について生徒玄関前の目立つ場所に展示することで、落とし物の多さに生徒が課題意識を持つような取り組みを行った。
(7) ７月に全教職員を対象に体罰の未然防止に向けた校内研修を行った。日頃より生徒への言葉がけなど体罰だけではなく、不適切な指導防止について教職員の共通理解を図った。自己申告の面接時に、全教職員に対して、生徒理解と信頼関係に基づく生活指導の重要性について意識啓発を図った。
(8) 「学校いじめ対策委員会」を設置し、7月、11月、3月に委員会を実施した。「学校生活アンケート」を6月、10月、1月に行ない、問題があると答えた生徒には声掛けするなど各クラス担任が迅速に対応することでいじめの未然防止、早期発見、早期対応の徹底を図った。

特別活動・部活動

＜目標＞
学校行事や部活動、委員会活動等への生徒の主体的な取り組みを通して、リーダーシップを発揮できる人間性と最後までやり抜く力を育む。
＜方策＞
(1) 学校行事や部活動、委員会活動等の企画・運営を通して、生徒の主体性や創造性を育てる。特に行事週間などにおける異年齢集団との交流を通して、生徒が自ら考え、判断し、集団の中で積極的に行動できるリーダーとしての素養を育成する。
(2) 学校行事を地域等に公開する中で、様々な人とのふれあいや交流を通して、豊かな人間性の育成を図る。
(3) 部活動に関する部費の適正管理を徹底する。
(4) 前期課程の部活動の地域連携を積極的に推進するとともに、週休日部活動の地域移行を順次進めていく。

(1)　行事週間では、委員会活動を通して学年縦割りの応援やクラス内で協力して何か一つのものを創作するなど、生徒の主体的な活動に十分に取り組ませることができた。また、部活動では興味・関心を共有する異なる学年集団で活動することで、リーダーとしての素養や集団の中での責任感を育成することができた。
(2)　体育祭や創作展、合唱発表会といった学校行事を地域、保護者に公開することで、学校外の人と触れ合い、説明することの大切さを生徒たちは経験することができた。
(3)　全ての部活動において、年度当初に「部活動の指導方針等」を策定し、適正な活動を行った。また、部費を徴収している部活動においては、通帳、現金出納簿、領収書による管理を徹底するとともに、副校長が現金出納簿を点検し、適正に管理されていることを確認した。
(4)　昭和小学校、駒本小学校に加え、駕籠町小学校での科学系部活動理科教室を新たに実施することができた。また、週休日の部活動の地域移行も少しずつではあるが進めることができている。

健康づくり

＜目標＞
心身ともに健康で、思いやりがあり、人間性豊かな生徒を育てる。
＜方策＞
(1) 学校保健計画に基づく保健指導を通して、生徒の心身の健康と体力の維持・向上を図る。
(2) 学習環境の整備と美化に努めるとともに、健康に関する生徒の自己管理能力を高める。
(3) スクールカウンセラー及び家庭と連携し、発達段階に応じた課題に学校全体で取り組む。
(4) 生命尊重の視点に立った生徒指導を行い、日常生活の中で生徒の変化を敏感に捉えるとともに、定期的に２者面談、３者面談を実施し、生徒の様子を適切に把握する。また、生徒の危機状況を早期に発見し、組織的な支援、関係諸機関と協力できる体制を構築する。
(5) 学校給食運営委員会を通して前期課程給食の運営状況を把握するとともに、給食を通した食育を推進する。
(6) 運動やスポーツとの多様な関わりを通して、健康で活力に満ちた生活をデザインすることができるように取り組む。また、体育授業にパラスポーツを取り入れることで、誰もがスポーツを楽しみ、生徒が自ら進んで体力の向上を図ろうとする態度を育てる。
(7) 特別な支援を必要とする生徒に対して、中野特別支援学校と協力して特別支援学級、通級学級を実施する。
(8) 精神科医派遣事業や産婦人科医配置を活用し、専門的な見地による健康相談を実施するなどにより、生徒の心身ともに健全な育成を目指す。心身ともに健康で、思いやりがあり、人間性豊かな生徒を育てる。
＜方策＞
(1) 学校保健計画に基づく保健指導を通して、生徒の心身の健康と体力の維持・向上を図る。
(2) 学習環境の整備と美化に努めるとともに、健康に関する生徒の自己管理能力を高める。
(3) スクールカウンセラー及び家庭と連携し、発達段階に応じた課題に学校全体で取り組む。
(4) 生命尊重の視点に立った生徒指導を行い、日常生活の中で生徒の変化を敏感に捉えるとともに、定期的に２者面談、３者面談を実施し、生徒の様子を適切に把握する。
(5) 学校給食運営委員会を通して前期課程給食の運営状況を把握するとともに、給食を通した食育を推進する。
(6) 運動やスポーツとの多様な関わりを通して、健康で活力に満ちた生活をデザインすることができるように取り組む。また、体育授業にパラスポーツを取り入れることで、誰もがスポーツを楽しみ、自ら進んで体力の向上を図ろうとする態度を育てる。
(7) 特別な支援を必要とする生徒に対して、中野特別支援学校と協力して特別支援学級、通級学級を実施する。
(8) 精神科医、産婦人科医派遣事業を活用し、専門的な見地による健康相談を実施するなどにより、生徒の心身ともに健全な育成を目指す。

(1)　４月に定期健診を実施するとともに、スクールカウンセラーによる全員面接を実施した。日常的にクラス担任を通して適切に健康観察を行い、必要に応じて保健室、スクールカウンセラーとの連絡、連携を実施した。保健室対応では、心身の健康の大切さ（睡眠休養の必要性、ケガの手当て、ストレス昇華についてなど）を伝え、その状況に応じた保健指導を行った。
(2)　美化委員会の生徒を指導し、ゴミの分別、清掃用具の交換、落とし物を探しやすくする工夫など学習環境の美化に取り組んだ。
(3)　スクールカウンセラーからの情報をもとに、学年や保護者、保健室が連携し課題の解決に取り組んだ。
(4)　学年は学校生活アンケートを受けての聞き取りの他、１、２学期に二者面談を、夏季休業中に三者面談を実施し、生徒の悩みに寄り添うとともに、保護者と情報共有を図った。
(5)　年間３回給食運営委員会を実施し､食育の在り方、給食指導について検討した。また、今年度コロナ収束後初めてランチボックス試食会を再開した。
(6)　シッティングバレーボールやボッチャ等のパラスポーツを通して、スポーツを楽しみながら行うことで体力の向上を図ることができた。
(7)　前期課程において、中野特別支援学校との連携により特別支援学級を実施し、後期課程において通級学級を実施して、特別な支援を要する生徒への指導の充実を図った。
(8)　精神科医派遣事業を活用して、生徒の発達時における困りごと等の保護者相談を実施した。また､「都立高校等における産婦人科医を活用したユースヘルスケア事業」で学校医として任用した産婦人科医により、前期生徒に対しての性教育講演を実施した。

進路指導

＜目標＞
キャリア教育を推進し、生徒一人一人の進路希望実現に向け、学校全体で取り組む。
＜方策＞
(1) 生徒の進路希望実現に向け、進路指導部主体で進路指導計画を立案し、学年及び教科と連携して実施する。
(2) 前期課程では、健全な職業観育成に主眼を置いたキャリア教育を実施する。
(3) 外部模試の分析結果を教科にフィードバックして、教科指導の改善を促す。
(4) 「進路の手引き」を活用して、生徒の自己実現を積極的に支援する。
(5) 各教科による模試の答案分析、大学入試問題の研究及び指導内容・指導方法の改善、年間指導計画や特別選択講座の内容の改善を推進し、教科指導力の向上を図る。
(6) シラバスに基づき、授業を実施し、評価、改善するマネジメントを定着させる。
(7) 長期休業日の有効活用を図るため、進学向け講習を企画・立案し、生徒への提示、調整等を行う。
(8) 同窓会と連携して、研究室訪問や分野別大学模擬講義を実施する。
(9) 自習室及びチューターの積極的活用を推進する。キャリア教育を推進し、生徒一人一人の進路希望実現に向け、学校全体で取り組む。

(1)　進路指導部が主体となって進路指導計画を立案して学年及び教科と連携し､「東京寺子屋」「職場体験」「進路ガイダンス」「研究室訪問」など、生徒の進路希望の実現に向けた取組を実施した。
(2)　１年生を対象として、11 月に東京青年会議所文京地区委員会と連携のもと職業講話「東京寺子屋２０２４」を行った。８業種の講師を迎えて講演いただき、生徒の職業意識を高めることができた。２年生を対象として、６月に２年生を対象とした職場体験を実施した。巣一商店会など地域からの支援をいただき生徒たちの職業意識の向上に努めることができた。
(3)　生徒の進路志望に対応するため、複数の外部模試を計画的、効率的に組み合わせて実施し、分析の結果、明らかになった課題を教科にフィードバックして、指導の改善を促した。
(4)　進路実現に向けた後期課程用「進路の手引き」を用いて、進路意識を喚起した。

(5)　各教科による学習指導要領改訂による大学入学共通テスト変更や新傾向問題への対策を行うとともに、これまでの大学入試の出題分析に基づいて授業内容や指導方法の検討を行った。前期課程では、学年末のアドバンスト模試の分析会を通じ、基礎学力を基にした発展的学力について検討を行った。さらに、各教科で実施した東大模試の答案分析や大学入試問題の研究を通して、最終学年の特別選択講座の内容改善や、５学年以前の年間指導計画での取り組みを促した。
(6)　各教科で作成した６年間のシラバスに基づき、年間指導計画と週ごとの指導計画とを連動させて作成し、それを基に授業を実施し、評価、改善を行った。
(7)　生徒が長期休業日を有効活用して学力の向上を図れるように、早い段階で進学向け講習や補習の計画を立案して提示した。特に６年生が夏季休業日の計画を立てやすいよう、６月段階で講習計画暫定版、７月段階で同確定版を作成した。
(8)　３年生から６年生を対象とした研究室訪問を１１月に実施した。参加した生徒たちは、積極的に質問や議論を行っており、研究室訪問が自分の適性を考えるきっかけとなるなど、将来の目標や上級学年での科目選択の際に活かされている。４年～５年対象の「分野別模擬講義」を同窓会と連携して１２月に実施した。模擬講義実施にあたっては、事前課題や参考文献を事前に受け取った上で当日に臨むようにしたので、生徒の反応もよく進路についての考えを深めることができた。
(9)　チューターの高いレベルでの学習指導や助言を生徒たちは積極的に活用した。また、自習室の活用状況は土日を中心によく利用され、学校に登校することで生徒同士が学習意欲の刺激をし合う場として機能した。

募集・広報活動及び地域交流

＜目標＞
(1) 募集・広報活動を全教職員の連携・協力の下に行い、本校の求める応募者の増大を図る。
(2) 地域交流を推進し、社会参加に関する生徒の意識及び災害など非常時の対応能力の向上を図る。
＜方策＞
(1) ＨＰを通した教職員の情報発信能力を高め、本校の特色ある教育実践を積極的に発信する。
(2) 全教職員の連携・協力の下に、授業公開、学校説明会等を実施して、本校の特色ある教育実践を発信するとともに、本校の求める応募者の増大を図る。
(3) 受検希望者の本校に対する理解を深めるため、小学生の来校機会を充実させる。
(4) 防災教育推進委員会の活用及び防災訓練の実施等を通して、非常時に対応できる資質・能力を高める。
(5) 地域と連携した活動を通して、生徒の社会参加意識を高め、進んで社会に貢献しようとする態度を養う。
(6) 保護者との連携をより密にするため、ＨＰ機能を活用するとともに、オンラインの活用についての検討を進める。
(7) 防災教育研究指定校として、地域と連携した防災の在り方を研究し、より安全な地域社会の建設に向けた取り組みを行っていく。

(1)　各学年、分掌のＨＰ担当者や、行事担当、部活動顧問から頻繁にＨＰ記事の更新を行い、教育実践、成果の広報を積極的に行った。
(2)　各学期に１回、計３回の授業公開を行い、本校保護者、小学生とその保護者に学校の教育活動を参観してもらうことができた。募集対策を兼ねて２回目、３回目の授業公開では小学生とその保護者を対象としたミニ説明会、相談会を実施した。学校説明会は２学期に２回実施し、大勢の小学生とその保護者が参加した。
(3)　授業公開、学校説明会以外にも小学生が参加するサイエンス・テクノロジーフェスタ、近隣小学生対象の理数系部活動体験、創作展での小学生参加などにより本校への理解を深めてもらった。
(4)　各学期に防災教育推進委員会を開催し、地域からの委員の参加者によりさまざまな意見をいただき、防災教育向上に役立てることができた。また、１０月の４年生を対象とした防災講話を行い、TBS アナウンサーで防災士による伊藤隆佑氏に講演していただき防災意識の向上を図った。
(5)　交通安全週間においてHR委員会が地域町会の取り組みに参加した。ＳＳＨ事業で得た成果を積極的に還元する取り組みを、科学系部活動の部員がボランティア生徒を積極的に行い、文京区立駕籠小学校に出向き、実験ワークショップや訪問授業を実施した。
(6)　校長からの連絡や各学年通信などを昨年度以上に頻繁にＨＰに更新し、学校の状況を保護者がよく理解できるように努めた。
(7)　防災教育指定校として、地域との連携を積極的に推進し、新たに近隣の東洋大学と防災の協力を得て連携することができた。

理数教育・ＳＳＨ

＜目標＞
(1) 第４期ＳＳＨ事業３年目にあたり、事業を適切に進めるとともに、第３期からさらに発展、進化した取り組みを目指す。
(2) 理数教科科目に対する生徒の興味関心を高め、自主研究、課題発見学習の質を高めていく。
＜方策＞
(1) 第４期ＳＳＨ事業計画に従い、様々な理数系カリキュラム等の開発・改善を進める。
(2) 大学との連携や接続の一層の強化を図る。
(3) 教員の指導力の向上を図る。
(4) ＳＳＨ運営指導委員会から指導・助言を受け、組織的に事業を展開するとともに、第４期ＳＳＨ事業の不十分と思われる課題についての精査を始める。
(5) ＳＳＨ事業の推進のため、校内組織の整備を進める。

(1) 第４期ＳＳＨ事業についての文部科学省の中間ヒアリングを受け、おおむね良好な評価をもらった。しかし、事業の評価方法について改善の指導を受けているので、今後、検討事項としていく必要がある。今年度のＳＳＨ事業は生徒たちが国際的なレベル、全国大会のレベルでのコンテストやコンクールで上位の賞を獲得し、きわめて高い成果を上げることができた。また、東京大学メタバース工学部と連携した小石川サイエンス・テクノロジーフェスタを開催し、文京区の小学生が大勢参加した催しを開催することができた。文京区立小学校に科学系部活動生徒を派遣して、理科教室を実施することも昨年度から継続して実施できた。５年生対象の学校設定教科である小石川サイエンスは、少しずつではあるが横断的な理科教育を実践することができるようになってきている。
(2) 高大連携・共同研究に関する協定を結んでいる東京農工大学をはじめ、東北大学、東京大学、京都大学と連携し、科学系部活動で指導していただいた。大学や企業の方をお招きし、研究活動についてお話をうかがう「サイエンスカフェ」を８回実施した。地学分野の「小石川と糸魚川・戸隠を結ぶ大地と生命」や、伊豆大島での生物フィールドワークを実施した。
(3) 小石川フィロソフィーの課題研究担当者会議を定期的に開催し、指導実践や評価に関する情報を共有した。このことにより、ＳＳＨ事業の効果が教科の授業に波及し、指導力の向上に役立った。
(4) ＳＳＨ運営指導委員会では運営指導委員の専門家、研究者の方から生徒の独創性や発想力を伸ばすための意見、研究を進めるための具体的なアドバイスをもらい、小石川フィロソフィーの研究向上に役立てることができた。
(5) 小石川フィロソフィー担当者会議を中心としてＳＳＨ関連の検討を進めることができた。再来年度の先導改革型ＳＳＨ事業に向けてＳＳＨ‐ＰＪを中心としこれからのＳＳＨ事業を検討していくことが課題である。

国際理解教育

＜目標＞
国際社会に生きる日本人として、求められる幅広い教養と豊かな感性、及び高い英語力に基づくコミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、グローバルな視点でものごとを考えられるこれからの時代のグローバル人材を育成する。
＜方策＞
(1) グローバル-ＰＪが中心となり、「Global Education Network 20」の諸事業を計画的に実行する。
(2) 授業を通して、４技能バランスのとれた英語力を習得させ、国内語学研修、海外語学研修、各種検定試験などを通して、段階的に英語の運用能力を高める。
(3) シンガポールへの海外研修旅行（５年）を行い、現地の連携校で研究内容について発表を行う。
(4) 海外からの訪問を積極的に受け入れ、国際交流を推進する。
(5) パリオリンピック・パラリンピック開催の年にあたり、ボランティア・マインドや障害者理解、体力の向上やスポーツ志向、日本人としての自覚と誇り、豊かな国際感覚等の資質や態度の育成を指導する。国際社会に生きる日本人として求められる幅広い教養と豊かな感性及び高い英語力に基づくコミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、グローバルな視点でものごとを考えられる人材を育成する。

(1)　オーストラリア海外語学研修、シンガポール海外研修旅行を実施するとともに、GE-ＮＥT20 の事業として海外留学を積極的に推進するとともに、多数の海外からの学校交流を引き受けた。
(2)　２学年国内語学研修を３日間の宿泊で実施し、事前学習として言語文化の授業でフォトブックやスキットを用いたプレゼンテーションの練習を行い、能力の向上をはかった。オーストラリア海外語学研修、シンガポール海外研修旅行についても、英語科の授業などを活用しながら、事前学習として４技能５領域の向上に努めた。
(3)　シンガポール海外研修旅行では、現地校４校との交流を行い、日本の文化の紹介、小石川フィロソフィーで研究した内容の英語での発表、ディスカッションを行うことができた。
(4)　４月台湾、６月シンガポール、７月フィンランド、９月オーストラリア、10 月オーストラリア、11 月タイ、11 月シンガポール、11 月オーストラリア、12 月カンボジア、１月フランスからの学校交流の訪問があった。特に今年度は 10 月のオーストラリアからの生徒は海外語学研修の８校の交流校の１校で１週間の学校体験、ホームステイを行い、相互の交流関係を深めることができた。
(5)　オリンピック・パラリンピック教育について、保健体育、家庭科、総合的な探究の時間、芸術科、社会科等の授業、さらには国内語学研修などで、関連する授業および行事を実施した。

（２）重点目標と方策

学校経営・組織体制

＜目標＞
(1) 本校の特色ある教育活動「小石川教養主義」「理数教育」「国際理解教育」を全教職員で推進する。
(2) 企画調整会議での積極的な協議、意見交換を通して、教員の方向性を揃える。
(3) 学校業務の効率化を図り、ライフワークバランスを推進する。
＜方策＞
(1) 理数教育については「ＳＳH-ＰＪ」、国際理解教育については「グローバル-ＰＪ」を中心に、各分掌、学年、教科と連携した上でそれぞれ推進する。
(2) デジタル技術を活用した教育の推進については「一台端末 - ＰＪ」を中心に運用していく。
(3) 各種会議を効率的・効果的に運営する。
(4) 教職員それぞれに応じた 生活と仕事との両立・調和がとれるよう働き方を改善する。

(1)　「小石川教養主義」「理数教育」「国際理解教育」の全教職員による共通理解を図りながら、同じ方向を目指して推進することができた。また、理数教育についてはＳＳH部が「ＳＳH-ＰＪ」で、国際理解教育については国際部が「グローバル-ＰＪ」で進行管理を行いながら教育活動を進めた。
(2)　企画調整会議では活発な意見や前向きな提言が行われ、学校運営の中心として十分に機能した。また、各ＰＪや委員会もそれぞれの担当内容をよく検討し、学校の運営改善に大きく貢献した。デジタル技術を活用した教育の推進については、「一台端末 - ＰＪ」による Teams の活用の校内研修、ICT リーダーによるＣ４ｔｈの適切な運用、理数探究基礎でのＭａｔｌａｂの利用など、さらに進めることができた。
(3)　働き方改革は学校全体に浸透し、業務の効率化が図られている一方で、超過勤務の教職員の固定化が目立った。育児や介護を抱える職員が多く在籍することからも、職員の不公平感につながらないように配慮していく必要がある。

＜数値目標＞
(1) 学校評価アンケートの評価項目Ｑ１～Ｑ３の「そう思う」を80%以上とする。
（前年度　小石川教養主義65.4%、Ｑ２「理数教育」72.6%、Ｑ３「国際理解教育」62.6%）
(2) 時間外勤務による産業医面接教職員の平均を５人未満とする。＜数値目標＞

(1)　Ｑ１「小石川教養主義」72.7%（昨年度 65.4%）、Ｑ２「理数教育」78.1%（72.6%）、Ｑ３「国際理解教育」71.9%（62.6%）であった。「そう思う」生徒の割合は増加し「ややそう思う」が減少して「そう思う」と「ややそう思う」を足した肯定的な意見の全体を占める割合は高いレベルを保っている。
(2)　時間外勤務による産業医面接職員の平均人数は４人であり、目標を達成することができた。

学力向上に向けた授業改善

(1)「授業第一主義」を実践する。
(2) 生徒の学力の状況及び推移を把握し、授業改善に反映させる。
(3) 授業力の向上に努める。
(4) 生徒の進路希望の実現に必要な学力の土台をつくる。
＜方策＞
(1) 基礎・基本の徹底を図るとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力及び主体的に学習に取り組む態度を育てる授業づくりに努める。
(2) 模試の結果を活用した分析会を実施し、授業改善に反映させる。
(3) 校内外における授業見学や研究協議への参加、大学入試問題の分析等を通して、授業力の向上を　図る。
(4) ５教科について、生徒の進路希望の実現から逆算して指導計画を見直し、大学入学共通テストの得点率８０%以上を目指す授業を実施する。

(1)「授業が一番大事である」ことを今年度も職員会議で校長から繰り返し教職員に共通理解を図り、教材研究と授業準備の努力、生徒たちの主体的な学習態度の伸長、適切な評価の在り方の研究など、地道な授業の質の向上を日々実践した。
(2) 日々の授業内における生徒たちの評価、定期考査、外部模試による学力の伸びの定点観測など、授業改善に反映し、よりよい授業の在り方、授業力の向上に努めた。模試分析会については、校長、副校長及び進路指導部、学年、教科担当者参加の下に実施し、検討した内容や工夫改善の手立てを記録して学年間で引き継いだ。
(3) 指導教諭による研究授業、教育研究員の教員による研究授業、教員相互の授業観察など、さまざまな取組により教員の授業力向上に努めた。週１回開催する教科会における授業研修など、授業について相互の意見を交換するなどを行った。
(4) 各教科で作成した６年間を見通したシラバスに基づいて、５教科の全科目において、大学入学通テストの得点率８０%以上を目指して、指導内容や指導方法の改善を図った。

＜数値目標＞
(1) 指名制の授業研究、指導教諭による模範授業及び予備校での教員対象大学入試問題指導力向上セミナーに40名以上を派遣する。（昨年度　32名）
(2) 大学入学共通テストにおいて、得点率80%以上の人数を、各教科・科目受験人数の60%以上にする。（前年度55.4%）

(1) 予備校での教員対象大学入試問題指導力向上セミナーに 34 名（42 講座）派遣した。
(2) 大学入学共通テストにおいて、151 名在籍で 150 名出願し受験した。受験した生徒のうち得点率 80%以上の人数は、各教科・科目受験人数の 59.8 %だった。全受験人数の 54.7%だった。

良い習慣の形成

＜目標＞
(1) 生徒がルールやマナーを尊重するなどのよい生活習慣が身に付く生活指導を行う。
(2) 生徒に予習・復習を前提として授業に臨む習慣を付けさせ、熱心に授業に取り組む態度を育成する。
(3) 学習に適した校内環境を整備し、時間を有効活用して学習する習慣を身に付けさせる。
(4) 基本的な生活習慣の形成を支援する。
(5) 各種検定等へのチャレンジを通して学習意欲を喚起させる。
＜方策＞
(1) 生徒の人権を尊重するとともに、「生活のきまり・確認事項(前期課程)」及び「生活のきまり及び留意点(後期課程)」に基づく生活指導を全教職員の共通理解の下に行う。
(2) 前期課程生徒に家庭学習時間を確保する学習計画を立てさせ、実行を支援する。
(3) 自習室や学校図書館の利用を推進する。
(4) 皆勤及び精勤（＝欠席・遅刻・早退のいずれかが１回）の生徒に対して表彰を行う。
(5) 英語検定、ＧＴＥＣ、数学検定、漢字検定等へのチャレンジを通して学習意欲を喚起させる

(1)　教職員間で生徒への指導の在り方について十分に検討し、生徒の人権を尊重して信頼を受けるに値するように心がけた。生徒指導の具体的な内容として、前期課程では基本的なルール､マナーの徹底、後期課程では前期課程で学んだ基本的なルール､マナーを基に自分で考えて正しい行動をとることができるように指導した。

(2)　生徒が過重負担にならないように配慮しながら、家庭学習の際の課題の指示を各教科で行った。適時小テストを行い、家庭学習の効果や理解度を確認した。

(3)　学校を清潔に保ち、換気や採光に配慮しながら学習を行うのにふさわしい学習環境を維持した。６学年生徒の学習環境を確保するために、週休日や放課後に自習室を開放した。また、ＳＳＨや国際理解の関連図書を充実させ、フィロソフィーの授業や調べ学習等で学校図書館の利用を促進した。

(4)　手帳を用いて自らスケジュール管理ができるような指導を行った。キャリアパスポートから、起床、就寝、学習時間を確認し、担任団からの指導を行った。

(5)　英語検定、IELTS、GTEC、数学検定、漢字検定に挑戦させ、自分の能力を高めていくように取り組んだ。

＜数値目標＞

(1) 学校評価アンケートの項目「私は、あいさつや時間を守ることなど、社会的なルールやマナーが身についていると思う」に対する生徒の肯定的な意見を90%以上にする。（昨年度88.8%）

(2) 学校評価アンケートの項目「私は、熱心に授業に取り組んでいる」に対する生徒の肯定的な評価を、90%以上にする。（昨年度86.8%）

(1)「私は、あいさつや時間を守ることなど、社会的なルールやマナーが身についていると思う」に対する生徒の肯定的な意見は88.3%（昨年度　88.8%）　であった。

(2)　「私は、熱心に授業に取り組んでいる」に対する生徒の肯定的な評価は、90.2%（昨年度86.8%）であった。

(3)　学校図書館における前期生１人あたりの図書貸出数は年間10,143冊（前期生：7,994冊、後期生：2,149冊）であった。

(4)　今年度の年間皆勤者数、精勤者数は表の通り　全生徒の中の皆勤者、精勤者数の合計の割合は28.1%（昨年度 33%）

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
年間皆勤者数	21	25	15	28	17	13
年間精勤者数	61	19	17	18	20	12
在籍数	161	160	159	158	156	151

(5)　今年度の年間の遅刻者の総数は表の通り　今年度の遅刻総数は6,363回（昨年度　計6,875回）

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
遅刻者数	735	525	771	1276	2080	976

進路指導

＜目標＞

各学年に応じた進路指導体制を充実させる。

＜方策＞

(1) ６年生対象

ア 進路希望調査、進路面談、大学別解説会、国公立大学出願指導を実施する。

イ 大学入学共通テスト対策講座、私立大学入試対策講座、国公立大学二次試験対策講座、大学入学共通テスト実戦模試、難関国立大学模試添削指導を実施する。

ウ 週休日等も含めて自習室を開放し、生徒が自ら学習する環境を整える。

(2) ４年生・５年生対象

ア 進路希望調査、研究室訪問、大学模擬講義を実施して進路に対する意識の高揚を図るとともに、模試等を通して学力の推移を把握し、面談等による個別指導に活用する。

(3) 前期課程生徒対象
ア 職業調べ、職業講話、職場体験等を通して職業観を育成し、「なりたい自分」の目標を設定させ、進路決定への道筋をつくる指導を行う。

(1) ６年生は、年間を通して二者面談および三者面談を実施し、生徒、保護者と意思疎通をはかりながら進路指導を行った。
６学年生徒の学習環境を確保するために、週休日や放課後に自習室を開放した。
ア ４月と 10 月に実施した進路希望調査の結果や模擬試験の結果を通して把握した生徒の進路希望をもとに、秋までに面接指導を行った。共通テスト後には、学年担任と進路指導部共同で、全生徒を対象とした出願指導検討会を実施した。
イ 12 月の期末試験後から１月の共通テスト前まで共通テスト対策演習を行った。共通テスト１週間前に当日と同時程での共通テスト実戦模試を実施した。
ウ 多くの教員の協力により、土日を含めて自習室及び教室を使用できるようにして、生徒が自ら学習する環境を提供した。
(2) ４年生・５年生は以下の取組を行った。
ア 11 月には大学研究室訪問を、12 月には大学模擬講義を実施して、生徒の進路意識を喚起した。
イ ５月と２月に河合塾全統記述模試を実施し、10 月には進研模試を実施した。１月には実際の共通テストの問題を使用したリアル共通テスト模試を行った。
(3) 前期生は以下の取組を行った。
職業調べや職業講話「東京寺子屋」を通して前期課程における職業観育成を図った。
１学年：１年次に職業講話「東京寺子屋」を通して前期課程における職業観育成を図った。
２学年：職場体験を６月に実施し、生徒の職業意識を体験活動を通して育てた。

＜数値目標＞
(1) 大学入学共通テストにおいて、
５教科７科目型の受験者を在籍者の80%以上にする。(前年度117名、78.5%)
５教科７科目型の受験者のうち、得点率80%以上の者を60%以上にする。(前年度56.4%)
(2) 国公立大学現役合格者を70名以上にする。(前年度84名)
うち難関国立４大学及び国公立大学医学部医学科現役合格者を40名以上にする。(前年度35名)

(1) 大学入学共通テストについて、本校の 1,000 点型受験者で、昨年 16 名(13.7%)だった得点率 90%以上の者は 18 名(14.7%)、昨年 35 名(29.9%)だった得点率 85%以上の者は 55 名(45.0%)と増加し、昨年 66 名(56.4%)名だった得点率 80%以上の者は 73 名(59.8%)となった。本年の６教科８科目型の受験者は昨年より５名増の 122 名で、在籍者 151 名の 80. 8%であった。
(2) 国公立大学現役合格者は 57 名、現浪合わせて 69 名で、昨年の合格者数は下回った。また、そのうち、難関国立四大学及び国公立大学医学部医学科の現役合格者は 31 名、現浪合わせて 42 名。内わけとしては、東京大学の現役合格者が１６名・現浪 16 名、京都大学が現役５名、現浪合わせて６名、一橋大学現役 3 名現浪合わせて３名、東京工業大学が現役６名、現浪７名、医学部医学科合格者は現役 1 名、現浪５名だった。私立大学現役合格者は、現役 402 名、現浪で 471 名であった。早稲田大学が現役 50 名、現浪 60 名、慶應義塾大学が現役 26 名、現浪 30 名となっており、医学部医学科は現役１名、現浪６名で、また、海外大学は現段階で現役１名 (１大学)となっている。

募集・広報活動及び地域交流

＜目標＞
(1) 募集・広報活動を一層推進し、本校の求める応募者の増大を図る。
(2) 全教職員の連携・協力の下に募集・広報活動を推進する。
(3) 本校の特色を表す体験授業を実施する。
(4) 災害などの非常時に対応できる資質・能力を高める。
＜方策＞
(1) ホームページを通した教職員の情報発信能力を高めるとともに、更新頻度を高め、内容を充実させて、本校の特色ある教育実践を積極的に発信する。

(2) 全教職員の連携・協力の下、授業公開、学校説明会等を実施し、本校の特色ある教育実践を積極的に発信するとともに、本校の求める応募者の増大を図る。
(3) 防災教育推進委員会を活用して、警察や消防、町会等から避難訓練や宿泊防災訓練に関する助言を受けるとともに、それらの改善・充実を図る。
(1) 募集・広報活動を一層推進し、本校の求める応募者の増大を図る。
(2) 全教職員の連携・協力の下に募集・広報活動を推進する。
(3) 本校の特色を表す体験授業を実施する。
(4) 災害などの非常時に対応できる資質・能力を高める。

(1) ホームページは年間を通し更新を３月１日時点で470件（内訳：留学だより50件、ＮＥＷＳ記事117件、部活動記事41件、小石川の日々、学年だよりなどの固定記事262件ほか）、業者委託47件行った。
学校案内（NAVIGATOR）の改訂、Youtubeオンラインを活用した学校紹介や部活動紹介、ショート動画の作成など新しい学校広報の方法を試みた。
(2) 10月と11月に学校説明会を２日実施し、合計で1,262組2,182人（昨年度1,626組2,372人）が来校した。また、校外における学校説明６件、雑誌やインターネット記事の取材３件などを通して、教育活動の発信に努めた。
(3) ５月授業公開、６月サイエンス・テクノロジーフェスタ、９月創作展、10月学校説明会、11月学校説明会、授業公開、２月授業公開を実施し、小学生が学校を訪れる機会を設定した。
(4) 学期ごとに防災教育推進委員会を開催し、冨坂警察署および小石川消防署、東洋大学からの助言、協力を得て防災訓練を実施した。２学期、３学期の防災訓練では、生徒の委員会が中心となり企画、実施した。

＜数値目標＞
(1) 授業公開、学校説明会、体験授業等の合計来校者数を6,000名以上にする。（昨年度5,661名）
(2) 一般枠募集と特別枠募集の合計応募者数を768名以上にする。（前年度687名）
(3) 近隣小学校、地域との連携事業を計３回以上実施する。

(1) 学校説明会の参加者は1,262組2,182人、授業公開の参加者は１学期1,559人、２学期1,188人、３学期1,102人、サイエンステクノロジーフェスタの参加者は155組310人、教育機関対象の学校説明会の参加者は68人、行事週間の準備を見に行こう！は164人､創作展には9,119名､学校紹介資料の郵送は(令和７年２月までに)37通､ホームページのアクセス数は2,086,063であった。
(2) 一般枠募集と特別枠募集の合計応募者数は554人であった。
(3) サイエンス・テクノロジーフェスタを文京区と連携して６月に実施した。また、地域ボランティアに８月と11月の２回参加し、近隣小学校の放課後活動交流12月に実施した。

ＳＳＨ

＜目標＞
(1) 課題発見力、創造的思考力、継続的実践力を高め、国際社会でリーダーとして活躍できる科学的人材を育成する教育の研究開発を行う。
(2) 第４期ＳＳＨ事業を学校内外に周知し、よりレベルの高い課題発見学習、自主的研究を実施する。
＜方策＞
(1) 「小石川フィロソフィー」について、各学年の生徒の発達段階に応じた知識や技能を育成するとともに、生徒の自発的な探究意欲を向上させることができるように、「ＳＳＨ-ＰＪ」を核とした全教科による指導体制をさらに構築する。
(2) 「小石川セミナー」及び「サイエンスカフェ」を一層充実させる。
(3) 「小石川フィロソフィー」と理数系部活動を連動させて様々な探究活動に取り組ませるとともに、研究成果について研究発表会等で発表を行わせる。その際、英語による論文作成や研究発表（ポスターセッションを含む）にも取り組ませる。
(4) 「小石川フィロソフィー」の継続研究を支援するオープンラボの充実を図るとともに、研究者や大学院生などによる課題研究メンターシステムを開発する。
(5) 国際科学コンテスト・国際科学オリンピック等に挑戦する生徒の取り組みを支援し、科学的思考力をもったグローバルリーダーを育成する。

(6) 大学との連携を強化し、各大学が主催するサイエンスキャンパス等に生徒を参加させるとともに、卒業生の在籍する大学研究室の訪問等を行う。
(7) 小石川フィロソフィー担当者会議やカリキュラムマネジメントのためのワークショップ型校内研修を活用して、教員の指導力向上を図る。
(8) 広報部との連携により「東大メタバース工学部×小石川中等×文京区　春祭り」を実施して、ＳＳＨとしての取り組みを地域に還元し、地域全体の理数教育のレベルアップを目指す。

(1) 研究分野に基づき、国語・社会・数学・理科・英語・体育・芸術のいずれかのRL－ROOMに属し、６年間の課題研究のまとめと成果の発信を行った。課題研究を振り返り、要旨・論文を作成した。また、研究成果を各講座やクラス内で発表することに加え、５年生に対し課題研究の取組を英語で伝える校内発表会を実施した。全校生徒参加によるオンラインの校内発表会では、小石川フィロソフィーVIの各RL-ROOM代表が発表し、後輩へ成果を継承した。研究要旨は、「研究概要集」にまとめ、６年生全生徒へ配布するとともに、課題研究に携わっている教員、在校生が自由に閲覧できるようにし、６年間の成果を全校に広げた。第４期ＳＳＨ事業３年目として文部科学省の中間ヒアリングを受け、事業の評価方法について今後の検討課題とされたものの、全体として良好な評価を受けることができた。

(2)　「サイエンスカフェ」を年８回実施し、大学や企業の方による最先端の研究の講義を実施した。
「小石川セミナー」では、東京大学 定量生命科学研究所 小林武彦教授を講師として「生物はなぜ死ぬのか」JT 生命誌研究館 名誉館長 中村桂子先生を講師として「「私たち生きものの中の私」として生きる―生命誌の視点から―」、本校の中等教育学校になった後の卒業生（1期生）である東京大学地球物理学準教授　森脇　先生を講師として「　　」の講演をしていただいた。

(2) 「小石川フィロソフィーⅠ」～「小石川フィロソフィーVI」を実施し、課題研究の取り組みを深めた。
①「小石川フィロソフィーⅠ」…国語科教員による授業で、基本的言語スキル（話す・聞く・読む・書く）力、意見構築力、思考整理法などの複合的言語スキルを育成した。
②「小石川フィロソフィーⅡ」…数学科教員による、実験を取り入れた授業で、統計学スキルを育成した。
③「小石川フィロソフィーⅢ」…プレ課題研究として位置づけている。９つのRL-ROOMに分かれて年間を通して課題研究を行った。３月には、発表会を実施し、１、２年生が見学した。
④「小石川フィロソフィーⅣ」…理数探究基礎（１単位)、情報Ⅰ（２単位)、人間と社会（１単位）の４単位で構成し、１～３年で一通り課題研究の過程を学んだ生徒が、４年生でこれまでの学びを振り返るとともに、５年生以降で取り組む高度な課題研究を行うためのスキルを高めた。
⑤「小石川フィロソフィーⅤ」…14のRL-ROOMに分かれ、年間を通して高度な課題研究を行った。３月にポスターセッションを含む発表会を学年内で実施し、要旨を英語にまとめ、「ライティングワークショップ」でALTによる個別指導を受けた。
⑥「小石川フィロソフィーVI」…(1)の通り実施した。

(4)　「小石川フィロソフィー」や「サイエンスカフェ」及び化学研究会などで大学教員や大学院生を招き、研究のアドバイスを受けた。また、卒業生が登録したメンターバンクを通して、理数探究基礎やサイエンスカフェの講師を招くことができた。

(5)　各科学系コンテスト開催を周知し、参加希望者に対して支援を行った。生物学オリンピックでは、5年生が日本代表としてカザフスタンに赴き、銀メダルを獲得した。また言語学オリンピックでも5年生がブラジルに赴き、銅メダルを獲得した。4年生を中心とした物理研究会ロケット班がモデルロケット全国大会で優勝、ついで全国ロケット甲子園でも優勝し、6月にパリで開催されるモデルロケット国際大会の出場権を獲得した。また、本校生徒以外の他校生も含む物理研究会ロボット班がアメリカのロボット大会に挑戦した。
国内大会では、2年生が第68回 日本学生科学賞 東京都大会で優勝し全国大会で3位となり、文部科学大臣賞を受賞した。また、Micosoft後援のアプリ作成コンテスト「ハッカソン」で2年生が優勝、4年生が準優勝となった。また、科学の甲子園で5年生が東京都大会で優勝し、全国大会に出場した。中学生科学コンテストでは、本校2年生のチームが総合優勝し、科学の甲子園ジュニア全国大会へ東京都代表として出場し、全国３位となった。

(6) Teamsや各教室掲示を通して、大学主催の「生命科学実験講習会」や「グローバルサイエンスキャンパス」等の開催を周知し、参加希望者への支援を行った。

(7)　小石川フィロソフィー担当者会議を５回開催し、効果的な課題研究およびプレゼンテーションの指導法について、担当者間の意見交換等を実施し、指導力の向上を図った。

＜数値目標＞

(1) 前期課程１学年及び２学年の理科において、実験・観察を扱う授業を７割以上にする。（前年度７割以上）
(2) 「オープンラボ」や「小石川フィロソフィー」等における英語による論文の作成件数を40件以上にする。（前年度58件）
(3) 英語による研究発表を50件以上行う。（前年度64件）
(4) 「サイエンス･カフェ」を10回以上実施する。（前年度12回）
(5) 国際科学オリンピック予選等に150名以上参加する。（前年度127名）

(1) 前期課程１学年及び２学年の理科において、実験・観察を扱う授業を７割以上実施した。
(2) 「小石川フィロソフィーⅤ・Ⅵ」の活動を中心に、47 件の英語による論文を作成した。
(3) 小石川フィロソフィーⅤ・Ⅵ校内発表会・ＳＳＨ海外研修・都内 SSH 指定校発表会を中心に、英語による研究発表を 87 件実施した。
(4) 「サイエンスカフェ」を８回実施した。サイエンスカフェを天文研究会で実施し、天体観測やプラネタリウムの解説を行った。
(5) 物理チャレンジ、化学グランプリ、日本生物学オリンピック、日本地学オリンピック、日本数学オリンピック（ジュニア数学オリンピックを含む）、日本情報オリンピック、ロボカップ、日本学生科学賞に合わせて 147 名が参加した。

国際理解教育の充実

＜目標＞

(1) 国内語学研修、海外語学研修及び海外研修旅行に共通な目標を設定して、教育効果を高める。
(2) 国際交流を推進するため、生徒の海外留学を支援するとともに、オーストラリアやシンガポールの交流校など海外からの本校への訪問、学校体験を実施する。
(3) 海外の大学や高校への留学に関わる情報提供及び進路指導を行う。
(4) 本校の概要を英語で広報する。
(5) 生徒の英語力の向上を一層進め、国際的な課題について、英語で思考、発表できる力を身に付けさせ、これからの我が国を牽引するグローバルリーダーの育成に努める。

＜方策＞

(1) コミュニケーション・ツールとしての英語力を高めるという共通の目標の実現に向けて、国際部が海外語学研修及び海外修学旅行の企画・立案を行う。
(2) 海外からの生徒や教員を積極的に受け入れる。
(3) 国際部を中心に、外部関係機関をはじめ、各分掌、学年、教科等と連携して、留学ガイダンスを実施する。
(4) 英語版の学校案内を国際交流や海外語学研修、海外修学旅行などの際に配布する。
(5) 英語ディベートコンテスト等へ、積極的に参加する。

(1)学年、英語科と連携して、海外語学研修と海外研修旅行で想定される英語を使用したコミュニケーション活動の練習を取り入れた。第３学年と第５学年では、オンライン英会話を実施した。
(2)積極的に海外からの交流を受け入れ、４月台湾、６月シンガポール、７月フィンランド、９月オーストラリア、１０月オーストラリア、１１月タイ、１１月シンガポール、１１月オーストラリア、１２月カンボジア、１月フランスからの訪問があった。特に今年度は１０月のオーストラリアからの生徒は海外語学研修の８校の交流校の１校で１週間の学校体験、ホームステイを行い、相互の交流関係を深めることができた。
(3)３月に留学ガイダンスを実施し、次世代リーダー育成道場留学プログラム募集説明をするとともに、後期課程における留学について説明した。
(4)国際交流を行った海外の生徒、教員に英語版の学校案内またはリーフレットを配布した。
(5)高英研スピーチコンテスト、高英研ディベートコンテスト、都内公立中高一貫校英語スピーチコンテスト、パーラメンタリーディベートコンテストに出場した。その成果として、４年生が第 60 回 東京都高等学校英語スピーチコンテスト２位及び３位、第 76 回高円宮杯全日本中学校英語弁論大会東京大会優勝、第 27 回東京都高校生英語ディベートコンテスト準優勝、第 19 回全国高校生英語ディベート大会特別賞を受賞した。

＜数値目標＞ (1) ３学年末までに英検準２級以上を取得する生徒の割合を90%以上にする。（前年度93%） (2) ４学年末までに英検２級以上を取得する生徒の割合を70%以上にする。（前年度83%）
(1) ３年生の英検準２級以上の級の取得者の割合は 94%（昨年度 85%）であった。 (2) ４年生の英検２級以上の級の取得者の割合は 87%（昨年度 88%）であった。

２　次年度以降の課題と取り組み

(1) 学校運営

世界的に急激に進展し発達するＩＣＴとネットワーク、ＡＩに柔軟に対応できるしなやかな組織運営をさらに強化していく必要がある。これらの新しいテクノロジーを教職員が理解し、共有し、使いこなすことができる体制を整えたい。とりわけＡＩの急速な能力の向上に伴うコンピュータ利用を学校教育の中にどのように取り入れていくかについても、学校組織を上げて考えていかなければならない。そのための本校独自のプロジェクトチームの編成の見直しを来年度に向けて実行し、教育活動の改善につながるように取り組んでいく。

私立高校の授業料無償化、男女枠撤廃といった状況の変化により、都立等中高一貫教育校よりも私立中学校人気が上回る事態となっている。こうした状況変化に負けないように、授業のレベル、進学実績、教員の能力、面倒見の良さ、教育施設、教育環境その他あらゆる学校の質の高さ、教育活動のレベルの高さを、小学生とその保護者に理解してもらえるように努めていく必要がある。また、学校広報の在り方を根本から見直し、小石川の良さを伝える方法を検討しなければならない。何よりもどこの学校よりも小石川は、質の高い教育を実践していると自信をもって言い切ることができる学校運営に取り組んでいきたい。

国際交流については、海外語学研修、海外研修旅行の実施を継続し、より質の高い海外研修を実施していくことに加え、ＳＳＨ事業の新たな海外研修を開発していくことを来年度の課題とする。また、アデレードやシンガポールの交流校からの学校訪問を継続的な取組として積極的に受け入れ、国際交流が進展するように取り組んでいく。

校務全体の見直しを進め、教職員の負担軽減を図り、教職員のライフワークバランスを一層推進する。また、男性教職員の育児休業取得を積極的に推進していく。

(2) 学習指導

学校の教育の根幹は授業である。生徒の知的好奇心を向上させ、思考力、判断力、表現力、創造性、豊かな心情を育てるためにも、これこそが小石川の授業であるという高いレベルの授業を来年度もつくり上げていく。基礎基本の習得の徹底を図り、ＳＳＨであることのアドヴァンテージを生かした体験活動を適切に交えながら、さらに小石川教養主義による文系理系すべての教科の学習、小石川フィロソフィーによる課題研究、デジタルサイエンスの習得、国際交流と高いレベルの英語学習を進め、教科横断的な学びと、学年縦断的な学習を取り入れるなどにより、さらに生徒の資質・能力を高めていく。また、教科を中心とした授業研究、教員相互の授業観察、予備校等で行う授業研修、大学が実施するさまざまなセミナーなど、あらゆる機会をとらえて授業力向上を図り、よりよい授業実施を目指していく。

(3) 進路指導

６年間一貫教育の特質を生かし生徒の発達段階に応じたキャリア教育を積み上げ、サイエンスカフェ、グローバルカフェ、小石川セミナー、大学の研究室との連携事業など、あらゆる機会をとらえて高度な専門性や、世界で活躍する人と触れさせることで、高い志、目標を高いもつことの大切さを生徒たちに理解させる取組を来年度も継続していく。将来の社会のリーダーとなり得る多くの人材が育っていることを実感する一方で、自分のやりたいことが見つからない生徒、将来を見通せない不安感から進路選択がなかなか決まらない生徒なども一定数いることから、卒業生のチューターによるアドバイスや、きめ細かい進路相談の体制を構築しながら、生徒に進路意識を育てていきたい。

(4) 生活指導

生徒の「ルール・マナー」育成については一定の成果があり、生徒たちからは社会のために何らかの役割を果たしていきたいと考えている様子が強くうかがわれる。自治的な活動としてのボランティアには生徒は積極的に参加し、例えば交差点での交通安全週間中の交通整理や、巣鴨駅等での地域の活動への参加、近隣小学校での理科教室の開催などには積極的に参加する様子がある。また、学年が上がっていくについて、ダイバシティの重要性、相手の立場に立った人権や尊厳の尊重、プライバシーや個人情報の保護、思いやりをもつなど生徒たちには着実にこうした成長が身に付いていて、ソーシャルススキルが育っていることを感じる。しかし一方で、自分の行動を律していくことなどについては、遅刻がなくならないなど今後の指導として重要なポイントとなってきている。

生徒からの相談体制の充実についても、保健室、学年担任団、ＳＣとで連携し、生徒の悩みに寄り添いながら来年度も進めていく。また、精神科医、産婦人科医の専門的な見地からの指導、特別支援教室と通級学級の実施を継続する。

(5) 地域連携

地域でのボランティア活動、HR 委員会の交通安全運動への参加、近隣小学校での理科教室など、地域とのつながりをもつ活動に生徒は積極的に参加していることから、こうした活動を来年度以降も継続する。防災の取り組みとして警察や消防、文京区、地元町会に加え、近隣大学との連携も継続して実施していく。